

## 審査結果の要旨

氏名 朝倉 友海

本論文は、スピノザ哲学における概念と個別性との関係を、主にその主著『エチカ』の読解を通して論じたものである。『エチカ』は、幾何学的論証において諸概念を積み重ねることによって世界全体の成り立ちを論じつつ、人間の個体的本質を各自が直観することを通して至福に至ることをその最終的な境位としているので、概念と個別性の関係という問いはまさしくその中核に位置する問題である。このような問題意識のもと、スピノザ独自の一般的概念の次元こそが個別性の理解を可能にしているという、スピノザに固有の概念と個別性との関係とその意義を浮き彫りにした点に本論文の独自性がある。

序論において基本的な問題設定を行った後、第一章は、スピノザ的な概念論の特質とその体系的な枠組みを解明し、本論文の大枠を提示する。スピノザの概念論は、知性そのものに定位することによって知識の成立を説明するデカルト「観念」説の全面的な徹底化だが、「観念の観念」という観点と観念相互の関係を問う視点が重要であり、そのような観念は一般的でありつつ事物を表現し得る真なる観念として提示されている。このような意味での観念を「共通概念」と名づけた『エチカ』の論証そのものが「共通概念」に支えられている。

第二章は、スピノザ的な概念論の中でもとりわけスピノザ的な、「身体の観念としての精神」というテーゼの意義を検討する。このテーゼは、人間が実体の様態に過ぎず、また人間精神が身体と独特の仕方では結びついていることを示す。以上から、いわゆる並行論における属性の位置づけというスピノザ研究史上の難問に対して一定の解答が与えられ、また、身体という個別的な事物のあり方に関して、様態の一例としての特殊性と他の事物との相互連関の中にある個別性という二つの側面を有することが解明される。

第三章は、スピノザ的な概念論をもとに形成される理性的な論証の根拠とその実現のありようを、認識を具体的に遂行する「理性の生理学」の検討を通して解明する。論証の根拠は知識論的に「共通概念」の成立によって根拠づけられるが、それはいまだ形式的に過ぎず、人間個体相互が織り成す関係性における本性の一致という実践的にして力動的な側面から説明されねばならない。そして、十全な認識を理性が実現することは、偶然的なよい出会いを組織化することではなく、理解するという理性の力能を発揮することそれ自体である。

第四章は、一般的概念において理解するということの意義を、個別的な事物の本質に対する直観知との関係において解明する。種的な本質とは異なる個別的な本質の理解こそが直観知において問題となることを明らかにした上で、直観知の可能性というスピノザ哲学解釈史上最も重要な問題に関して、直観知が諸事物の連関の中に埋め込まれた自己に対する体験的・自覚的な知であることを強調しつつ、理性知が永遠の相のもとに立つことによって身体の本質を理解するのであり、理性知と直観知とは、前者は外延的、後者は内包的という違いをもちながらも分かちがたく、この二つの知の相即性において個別的な事物の理解が成立すると結論づける。

このように、本論文は、一般的概念と個別性との関係という問題意識からスピノザ哲学を一貫した仕方では読み抜き、その意義を解明した労作である。分子生物学の研究から出発したという経歴や近世儒学の素養を活かして事柄を広い視野において論述しようとする姿勢も高く評価することができる。他面、自らのテーゼを打ち出す際にテキストを根拠とした論証にやや欠ける点、表現や論述に未消化の部分が残っていて読者に理解の努力を要求する点、さらに、「表現」の主題などにおいて展開不足が見られる点など、もの足りなさはある。とはいえ本論文は、スピノザ哲学の提示した概念と個別性との関係の諸相とその意義とを十分に描き出し、今日の私たちにスピノザ哲学の独自の意義と一般的概念によって個別性を哲学的に語ることの可能性を十分に示すものである。よって、本論文は博士(文学)の学位を授与するに値すると判断する。